

## 第三十九号

# 若竹



三島・森田両烈士慰霊祭

## 愛媛県神道青年会

事務局 〒790-0934 松山市居相町337  
伊豫豆比古命神社 社務所内  
TEL 089-956-0321

## 第八回神道青年

## 四国地区協議会研修会

高松市

平成十四年八月六日から七日にかけて、香川県厚生年金会館・陸上自衛隊普通寺駐屯地にて神道青年四国地区協議会第八回定例総会並びに研修会が行なわれました。

当会よりは三輪田会長を始め五名の会員が参加しました。一日目は普通寺にあります讃岐宮(香川県護国神社)にて正式参拝、その後同社にて定例総会。今回の研修のテーマが「防衛問題」についてという事もあり、隣接する陸上自衛隊普通寺駐屯所に移し、資料館を始めとする各所の見学の後、陸上自

衛隊第二混成団・副団長 林

政夫先生による基調講演を戴きました。危機管理・災害が起った時(阪神大震災を中心として)の自衛隊の対応、自衛隊の在り方など、映像と共に説明を戴き、私達の生活を守る為に日々御尽力を戴いている事を改めて感じる事が出来ました。その後高松市内の香川県厚生年金会館へ移動し、懇親会を行い親睦を深めました。

二日目は同所にて日本大学法学部教授・神社本庁教学委員であられます百地章先生に我が国の防衛問題、憲法と集団的自衛権についての基調講演を戴き、その後、元自衛隊東部方面総監 重松 恵三先生に、日本に対して起る他国からの脅威、ま

たその安全対策はどうなのかについての基調講演を戴きました。先生方の講演を聞くうちに、国内外に有事が起こった時どう対応するのかと考えさせられました。

今研修会を通じ、自国防衛について数々の政策があり、その現況を再確認する事が出来ました。しかし、世界に目を向けると各国で頻発するテロによる目を覆う様な惨事が起こっています。日本はどうなのか? 今一度自国の安全について見つめ直す事が必要と感じる研修でした。

(十亀)

## 第十八回

## 観月神楽の夕べ

新居浜市

去る九月二十一日(土)、新居浜市中村に鎮座致します白山神社(大岡益子宮司様)におきまして、第二十回を数える恒例の「観月神楽の夕べ」が開催されました。

当日は会長を始め青年会会員十七名と例年お手伝いを下さっております先輩神職の方五名、また石鎚神社の巫女様四名と白山神社の小学生の巫女様四名の総勢三十名にて「浦安の舞」「式三番」「越天楽」「神林細女之舞」「陪臚」「悠久の舞」「弓之舞」の演目で奉納させていただき、境内に設営の舞台周りに



参集していただきました二百名  
余りの方々からは拙い演奏では  
ありませんでしたが、演奏が終わる度  
に暖かい大きな拍手を戴き、誠  
に在り難い限りでした。

また最後となりましたが、大  
岡宮司様を始め、神社総代の皆  
様、そしてお手伝いをいただき  
ました各方面の皆様方には、御  
準備等何かとお世話になりました  
た事、紙面をお借り致しまして  
厚く御礼申し上げます。(大岡)

### 三島・森田両烈士慰霊祭

去る平成十四年十一月二十五  
日午後5時より松山市・伊豫豆  
比古命神社会館二階にて「三島・  
森田両烈士追悼三十二周年慰霊

祭」が愛媛県神道青年会会長  
三輪田泰生斎主の下、厳肅に行  
われた。

青年会役員八名、そして参列  
会員四名で行われた今回の慰霊  
祭、昨今の時勢を鑑みるに、各々  
心に思う処があつたのではない  
であろうか。国外での様々な事  
件や国内の無責任な価値観の流  
布や混沌とした状況。我々を取  
り巻く現在の環境は、あの当時  
三島・森田両烈士が憂いた情況  
そのものではないであろうか。  
慰霊祭は毎年やってくる。我々  
も少なくとも年に一度はあの時  
代、三島由紀夫と森田必勝がと  
つた行動の真意を考え、そして  
その折の危機感を甦らせるべき  
ではないであろうか。この様な  
時代故に大切な価値観の基準点  
としてもこの日を捉えたいと思  
う。(和田)

### 慰問神楽奉仕

平成十四年十月三十日(水)  
に観月神楽と並ぶ当会の活動の  
一環として行っている演奏会を、  
「松山の文化を育む会」主催に  
より松山市民会館小ホールにて  
ご奉仕致しました。

そして演奏終了後には雅楽に  
親しんでいたくという趣旨の  
元実際に雅楽器を手を取って  
いただき、それぞれの形容や役割  
を知っていただき、また奉仕者  
各自質問等にも答えながら、和  
気藹々とした中での演奏会を終  
えました。

次回開催の折りにも参加して  
頂きたいという要望まで頂戴し、  
誠に身のある今回の神楽奉仕に  
なりました。(和気)

### ▼臨時連絡▲

平成十五年一月二十八日、愛  
媛県神道青年会臨時総会におき  
まして次期役員案が可決されま  
した。

- 会長 和気省一
- 副会長 矢野敬陽
- 副会長 小野哲也
- 副会長 長曾我部昭一郎
- 事務局 十亀博行
- 理事 一宮康人
- 理事 和田正成
- 理事 大岡忠徳
- 理事 武知秀忠
- 理事 長曾我部信弥
- 理事 渡部太輔
- 理事 吉田充興
- 監事 眞鍋豊孝
- 相談役 三輪田泰生

(任期：平成十五年四月一日、  
平成十七年三月三十一日)

取り急ぎ御報告致します。よ  
ろしくお願い致します。

## 「作法の扉・日常奉仕を垣間見て」

会員の皆様こんにちは、今回は日常の御奉仕の中で「ちよつと勘違いなさっていらつしやるんじゃないかな?」というテーマです。一度に沢山記すと読む気も失せるので、小出しにさせて頂きます。「ったく細かいんだから!」って云わないで下さいよ、特に南郡のサポートセンターさん。

PCはもつと細かいでしょう………笑  
皆さん是非参考にして頂ければ幸いです。

### 「狩衣等装束を著けての御奉仕で腕時計を著けている!」

社務所事務に専ら従事するのであればまだしも、著装してお宮参り等神事を御奉仕するとき腕時計は如何なものでしょうか。因みに神宮では和装の折は懐中時計を著すと指導なさっています。

### 「浄衣・白衣・陪膳・前導の読み書きの間違い!」

- ・浄衣 じょうえ (じょうい) ではありません
- ・白衣 はくえ (はくい) ではありません
- ・陪膳 はいぜん (ばいぜん) ではありません
- ・前導 ぜんどう (せんどう) 先導 ではありません

皆さん御自身のお名前をいつまでたっても「違う読み」をされたら如何思われますか?我々は若くても一応この道のプロですよ、固有の言葉は正しく使いましょ。

まさか「衣紋」を「いもん」とは読まないですよね。

### 「狩衣浄衣の袖をぬいた姿」

太鼓を叩く時とかは理解できます。しかし移動中とかに袖をぬいた姿はまるで時代劇の「チンピラの世界」そのもの、見るに堪えない姿です。神様だけじゃない、氏子さん達もしっかり見えていますよ、気をつけましょ。

### 「著装の際袴の紐をかい込んでいない!」

白衣袴姿では袴の紐をかい込んで出してもどちらも良いとされています。白衣は本来「今で云う下着」であり狩衣等を著けてはじめて「装束」となるわけです。著装の際袴の紐は必ず「かい込む」事を忘れないで下さい。袴の紐を平素かい込んでいらつしやる御方には関係のない話ですが、紐を出されている御方のみの問題なんです。愛媛は出している御方が多いですよ。しかし残念な著装時に紐をかい込む御方は少ないようにお見受けします。衣紋道の高倉流山科流両派どちらも著装の際、袴の紐は必ずかい込む事が大原則です。國大皇大が云々の話ではありませんよ。

『軾に著く前（止立位置）爪先が軾にピッタリ接している』

円座と勘違いなさっていらつしやるんでしょうか？

祝詞奏上とか拜礼を行うにあたり、軾の前で止立し小揖そして膝をつくのですが、その止立の位置、爪先を軾にピッタリ接している御方の何と多い事か、いや多いつてもんじゃありませんね、大多数の御方がそうなさっているんですよ。

若い我々でも毎日同じ間違いを繰り返せば必ず悪い癖として身につけてしまいますよ。話は横道に逸れますが、聞くところによると会員の皆さんあまり祭式研修会に参加されてないそうですね、一年に二回しかない祭式研修会です、是非参加して研鑽は勿論の事、作法の再確認をしてもらいたいですね。柳原那須両講師はかなり厳しいですけど「鉄は熱いうちに打たねば」ですよ。勉強しな

本論に戻りますが、軾前止立の位置は軾の端と爪先の間に足一つ若しくは足半分あける事が肝心です。実践して頂くと良くわかるのですが、逆に軾から起つ作法を行って下さい。勿論軾を踏んで起つては駄目ですよ。どうでしょう、必ずや軾の端に爪先をピッタリつけて起てないでしょう。つまり行きも帰りも同じ位置に止立するのが大原則なんです。祭式には一貫性があつて、例えば「一歩進むから一歩退く・三歩進むから三歩退く」と同じことです。あまり難しく考えない事です。

『左右面相對した祭員參列者が斜めに向かい平伏磬折？』

正中を扶んで相對した祭員や総代が祝詞祓詞奏上時や警蹕発声時「斜めに向かい腰を折る」場面に偶々祭員として遭遇いたしました。大先輩の神職そして総代の中で真つ直ぐ正中に向かつて平伏したのは私だけでした。多勢に無勢まして一人だけ若輩となればおのずと「若い神職さんだから……」という嫌な雰囲気ですよ。

恐らく「宮司一拜・拜礼における本座での列拜」と勘違いなさっているでしょう。確かにこれらは自らも行う行事でありますから「斜めに向かう」作法を行うことは正解です。然乍「祝詞祓詞奏上・警蹕発声」は自らの行事ではありません。よつて決して斜めに向かうことはありません「そのまま真つ直ぐ正中に向かい腰を折る」のが正解です。

この件もご多分に漏れず「旧祭式では……」と言いつつ必ず聞きますが、旧祭式にもこんな作法はございません。

会員の皆さんは勿論ご理解頂けると思いますが、総代さんにも周知徹底して下さい。

祭式は何度も変遷を繰り返していますが、現行神社祭式同行事作法を理解せずに「旧祭式」の研究をすすめる事は何等意味の無い事であると思えますね。ではまた。

# 編集後記



七尺程の小さな船(カヤックです)に乗り、白泡渦巻く川で遊んでいると、つくづく心が洗われる思いがする。五感と五体を使い、そこにある自然に身を投じる。流れの複雑さ、そして力強さに翻弄されながらも、その波と協調する瞬間、全てがよしなし事から解放され、魂が浄化される。そして川岸で休憩する時、そこに吹く風にすら柔らかな感謝の念を覚える。春は猫柳の蕾に、夏は水苔の香りに、秋は水面舞う落ち葉に、冬は身を凍らす北風に。その全てに必然性を感じ、その周囲に存在する全てのものを許容する。身を投じた自然は、様々なものを私

達に惜しみなく与え、それを感じる事が出来る者には神々の働きを垣間見せてくれる。川を取り巻く山々、そして河原の小石に至るまで、その細部に神々は宿り、その瞬間刹那にも神は微笑む。そこにいらつしやる神の名を知らずとも、確かに畏き、そしてありがたい思いに包まれるなにかの存在を感じる。川という自然に限らず、日常の周囲にも遍く神々は存在し、我々が気付かなくともそれは絶えず働きかけてくる。物の形状にも、その佇まいにも。我々は日常、どれほどの神の恩恵を感受出来ているのであるか。毎日ご奉仕申し上げる各社の御祭神、そして訪れる社に祭られている神々、或いは我が身を現世に頭らわしてくれた御

先祖様。そして此の世に存在する、或いは存在しなくとも精神的繋がりを感ずる全てのものに、果たして我々はその与えられるものと同等、またそれ以上の感謝の念を抱けているであろうか。「否」。少なくとも現在の私達は与えられ、伝えられてきたものを次の世代へそのまま伝える事はおろか、同時代に生きている者への感謝の念も希薄になっているのではないか。与えていただいたものを浪費するだけでそれを返す事を厭う、それでは「神道」はもとよりながら「人道」にも悖る行為である。青年と言われる年代は、様々な葛藤や欲望を抱え、そしてのたうちまわる年代である。自己顕示欲、自己正当化、自己弁護、

自己愛。様々な内なる葛藤と戦いながらの毎日、なかなか日常に宿る神を感受する余裕もない混沌とした毎日である。

願わくば、穏やかで大らかな、そして心に過津神の過事のない、そんな毎日を過ごしたいものである。我々は「神道人」である。「神主」である。その者が細部に宿る神の恵みを感じられないで、何が教化、何が講話。中身の無い絵空事である。

小石ひとつ、そして身を包む風にも神の意思を感じたい、神の息吹を感じたい。そんな毎日を得たいと、御隠居様の思いに焦がれる、まだまだ混沌とした青臭いワタクシであります。先は長い。(成)